

# 風薫る白い花の香かな

撮影取材で出会った探訪記

## 第3話

尾道市文化財保護委員 写真家  
尾道ユネスコ協会事務局長 村上宏治



### 【多様性の中の共通項を探して】

二年目を迎える「八朔ゆかりの会」の一員として、八朔を巡ることから始まり、様々な柑橘を訪ね歩き調べていく中で、たくさんの事に出会いました。それらの出会いを綴っていますと、ある疑問がよぎります。

「柑橘とはいったい何なのだろうか、色々な立ち位置で見ることが出来る柑橘とは」と。

習慣としての柑橘、生業としての柑橘、文学の中の柑橘、古事記や日本書紀に見る柑橘、信仰に見る柑橘、生薬や薬膳としての柑橘、フルーツとして、スイーツとして、生産物と様々な見方ができます。地域・文化・価値観・歴史が複雑に絡まる柑橘ですが、その多様性の中に共通したものがあるはずだと私は思うのです。

### 【新品種の誕生の確立】

柑橘の他種同士での交雑では、新品種の誕生に至らないケースが大半で、交雑により発生した芽

としての役割を持ち、食物の保存に使用しました。後に妙薬として、薬膳としての意味合いも強くなっています。

平安時代よりその信仰が高まる、とある仏の姿があります。諸々の毒を取り除き人々を災厄から護るといふ、左右合わせて四本の腕を持つ孔雀明王です。その二番目の右の手には、これを食べると元気がでるといふグエン果と呼ばれる柚子などを意味する果実を持ち、左手に持つ吉祥菓は鬼を撃退する霊力を持つ強い法力を表す、果実の入った袋を持ちます。



孔雀明王の持つ「グエン果」

から新品種が生まれる確率は、明治以前においては、二五、〇〇〇分の一だったと言われています。昭和五十六年（一九八一）以前では一二、五〇〇分の一、技術向上や交配親の選抜での効率向上した昭和五十七年（一九八二）以降でも二、五〇〇分の一となっておりませんが、いずれにしても新品種を生み出すには長い年月とともに相当の労力と費用が必要となります。普段何気なく頂いている柑橘ですが、奇跡の連続の中で、一つの果物としてこの世に生まれてきたのですね。

### 【日々進歩するDNA解析で判明した柚子の伝播】

原産地は揚子江上流とされる柚子の日本伝来の定説としては、遣隋使・遣唐使により運ばれたとされ、飛鳥・奈良・平安時代初期に伝わり、栽培していた記録が残ります。

現在は、四国山地を始め、九州山地、中国山地、紀伊山地といった山間部に産地が集中していますが、これは昭和四十年（一九六

ちなみに平安時代から明治時代に入る頃まで、果物の事を総じて、関東では水菓子、関西では菓子と言われていました。

現在の柚子の産地は山岳信仰が今も重なり、その地には不思議と大小の温泉も湧き出しています。温泉と柚子（柑橘）。私はついつい湯治場、湯治を想像してしまいます。柑橘類の皮や葉は入浴剤にも有用で、寒い冬に柚子湯が使われてきた昔ながらの知恵が、科学的に証明された実験結果としてあります。疲れた体には最高の処方箋だと。

五）頃から、それまでの主産業であった農耕馬の生産、林業、木炭製造、和紙原料栽培の衰退やそれに伴う過疎化に対しての活性化対策として、柑橘産地が形成されたものが多いためであるとも言われています。

しかしその一方で、京都大学から発表された内容に、とても興味深いものを感じました。日本に入ってきた柚子は、奈良で一度栽培が始まります。柚子のDNA解析の結果、その栽培から国内伝播の経路が解明されました。その伝播は修験の山伏達の行場と共に、奈良を起点として、京都伏見エリアから醍醐寺修験道の霊場である大峰山。九州は、英彦山系と祖母山・八女の霊場。日本最古の霊場である葛城山系から熊野古道の三ルートが基本となり、熊野古道を起点に、西は四国お遍路へと伝わり、東は、お伊勢参りへと。英彦山系を起点に九州各地、中国、四国の西部まで柚子が伝わったことが、DNA解析で分かり始めました。

後に山岳信仰と仏教が習合し、密教などの要素も加味されて確

